ひまわりからのメッセージ

１３８号
2023.4.10
NPOひまわりの花内
西濃圏域
発達障がい支援センター
発行人：中野たみ子

命の輝き

朝、何気なくテレビをつけるとＮＨＫＢＳでワイルドライフという番組をやっていました。取り上げられていたのは、モンゴルのアルタイ山脈に生息するユキヒョウの親子でした。私が見たのは番組の途中でしたが、監視カメラは崖の上で尾をピンと立てて怒っている母親の姿をとらえていました。崖の下にはヒョウの子が母の機嫌をとろうとしたのでしょう、母に見つからないように後方からよじ登ろうとしています。するとその時、母親はすごい勢いで崖をかけ下り、子を追い払ったのです。仕方なくヒョウの子はすごすごと崖を下りて行きました。

実は、これはユキヒョウの子が母から独り立ちしていくための大切な儀式なのだそうです。

生後一年半を過ぎると、ユキヒョウの子はこうして母親の元を離れて険しい岩山で生きていかねばなりません。子の自立のために母は子を追い払うのですが、しかし、実はその後もしばらくは母の縄張りの中で子は生活していきます。つまり母は、自分の縄張りの中で見守りながら子が獲物を捕る練習をさせるのです。

監視カメラが映し出したユキヒョウの母と子の姿に、私は人の姿を重ねていました。いつまでも親に依存する子、そして子どものことが心配だから……と、いつまでも干渉したり手元に置いて養い続ける親と……厳しい自然界にあって生死を賭けて生き続けていかなければならない動物と違うのは当然ですが、私たちは、それが愛情だと信じて、もしかしたら子どもの自立を妨げているのかもしれません。「支援は引き算です」ということばをもう一度かみしめたいものです。

庭先では花韮（はなにら）が群生し、著莪（しゃが）もあちこちで咲いています。野山同様のわが家の庭土は、きっと華やかさを嫌って少し寂しげで地味な花を好んでいるのでしょう。花韮は別名「ベツレヘムの星」とも呼ばれているそうですが、もとは南米原産だというのに、どうしてアラブの名がついているのでしょう。しかも植えたこともないのに、いつ頃からわが家で咲くようになったのか今だに謎なのです。

今年の朝ドラは牧野富太郎博士の生涯が描かれるとのことですから、雑草だと思っている小さな草花のいのちをもっと知ることができるかもしれません。それも私の楽しみです。

新年度を迎えて「ことばかけ」の大切さ

新年度が始まり、子どもたちも先生方も、そして保護者の方々も新しい出会いに不安と期待をもって臨んでおられることでしょう。

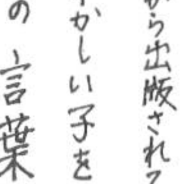
子どもたちの中には、新しいことが苦手だったり、大人の大声や癇高い声におびえたり、言われていることばの意味がとらえられずに不安になったりする子もいるでしょう。初対面の印象で相手のことを判断してしまう場合もあるかもしれません。心配ですよね。

そして、もう一つ私が心配でならないのは、親さん方の学校や教員に対する見方です。私たちは誰一人として完全な人間はいないのですが、まるで自分の見方だけが正しいかのように先生方のことを子どもの前で非難する保護者にならないようにしてもらいたいと私は思っています。先生の悪口を親の口から聞かされた子どもが先生を信頼することは難しいでしょうから……。この頃は自分中心に考える人が多くなりましたが、私たち自身が自分を客観視できる「メタ認知」をもっているのかどうか、他者を非難できる程の人間なのか、考えてみましょう。もちろんそれは、保護者だけの問題ではなく、私たち一人ひとりの問題です。学校という場が、子ども達にとって楽しく信頼できる場であること、そのためには子ども達と関わる大人達が信頼し合える関係を作っていくことが何より大切なことですよね。

先生方も、「クレームをつけてくる親だ」とか「過干渉で困る」等と決めつけずに親さんたちの心配を聞いて、解決法を一緒に考えて下さると良いですね。家庭と園や学校は子育ての両輪だと私は思っているのです。

新年度にあたって、小栗正幸先生の本を一冊、ご紹介しょうと思い立ちました。講談社から出版されています。

『指導・支援のむずかしい子を支える魔法の言葉』



まず、この本には、困った行動を起こす子には二つのタイプがあると書かれています。一つは自分自身が困っている子、もう一つは「困った」という自覚のない子です。誰が「困っている子」で誰が「困っていない子」なのかは話し合ってみないと分かりません。

「困っている子」の場合は、行動自体は困ったものでも子どもの気持ちは理解できるので頭ごなしに叱ったりせずに共感し、どうしたら良いか、適切なアドバイスを送ることで望ましい方向に進んでいきます。けれども頭ごなしに叱ったり感情的に一オクターブ高い音声でどなりつけてしまうと、互いに感情的になってしまいます。子どもたちの中に

将来もそのことがずっとトラウマになってしまう場合もありますから要注意です。

一方で「困っていない子」に対しての対応は、「困っている子」と同じ対応では駄目だと小栗先生は書いておられます。以前の著書には、暴言に対して「心にもないことを…」と返せば良い。」と書かれていましたが、今回は一歩踏み込んで本人が自分は困っているのだということを自覚させる必要があるのだと書かれています。「困っていない子」は、「うぜっ」「殴ってやる！」などと言って怒っていたり、「どうせ、どうでも良いし…」と、やる気をなくしていたり、「話し合いなんか意味ないでしょ」と決めつけていたりして、支援や指導が難しく、大人がイライラさせられてしまいます。会話も成立しません。このように支援や指導のむずかしい子には、メタ認知の獲得の難しさがあり、説諭や受容は逆効果だと小栗先生は書かれています。

「もう死にたい」・「皆に嫌われている」と訴える子に「どうしてそんなことを言うの」とか「そんなふうに思うのはつらいよね」と子どもの気持ちに真正面から対峙するのでなく、少し的を外して「なるほど、そんなに困っていたんですね」と言う方が後の対話が成立すると考えられています。

明らかに間違ったことをしたり言ったりしている子に対して、正しいことを教えようとして「間違ってる」・「いいか、よく聞きなさい」と言うよりも「あなたも良くわかっているように…」と肯定的に言うことで相手も肯定的になりやすいのです。「わかっていると思うけど」ではなく「わかっているように」と断言的に言うことが必要です。しかし屁理屈のような「でたらめ」しか言わない子もいます。そんな子とは対話は成立しないので大人は「良い加減にしなさい！」「自分の言っている意味がわかっているのか！」と声を荒らげることになってしまいます。そしてお互いに不快感をつのらせてしまいます。私たちは、それでも何とかして対話にもっていきたいので「そういうことが堂々と言えるっていいなあ」「私も言ってみたいなあ、うらやましい」等と皮肉で応じてみるのも良いでしょう。皮肉に対して「バカにしてるの?!」と怒ってくる時には「あっ、怒らせちゃったかな、ごめんなさい。でも、たまに怒るのも良いもんだよ」というような対話が成り立っていくでしょう。

暴言や悪態に対して、小栗先生は「また、心にもないことを…」と受け流すように教えて下さいましたが、私は小学生には少し難しいと思い「あ、そう…」と受け流すようにしてきました。そして少し話題を変えて「さっき○○していたよね。面白そうだったね」とか、掲示を見て「この絵、あなたが書いたの、すごいね」等と話しかけると、子どもたちは、すっと気持ちを変えてくれます。そして、そんな時に「ねえ、いつもがまんしていることが多いんじゃないの？」「そういう時は、大声出したりしないで担任の先生にこっそり教えるといいよ」などと話したりします。私の場合は担任でもないし、その学校の

教員でもないので、そんなことしか言えませんが、子どもたちが自分のふるまいに対し「がまんできていることも多いんだ」と気づくことで思い通りにならない時の対処法を考えるきっかけになることもあるでしょう。

嘘をつく子に関しては、小栗先生は「人をだまそうとして嘘をつくのではなく、嘘言癖のある子はコミュニケーションの手段として使っている」と書かれています。嘘をつく子は基本的に多弁なので沈黙に耐えられず、とにかく話しつづけようとするのですが、その話の中には必ずその子の好きなことや興味のあることが含まれています。ですから、その子の興味のあることを話題にしてあげれば嘘をつかなくてもすむと考えられるのです。

加害行為に対しては、「あなたがしたことは許されない行為である」と、はっきり分からせる必要があると書かれています。日本は法治国家ですから法に触れるような行為は当然許されないことです。どんなことがあっても暴力は許されません。ところが、加害者にも当然言い分があります。「あいつがしつこかった」「言い方がむかついた」「相手にも謝ってほしい」等々加害者の子は色々と理由を訴えてくるはずです。小栗先生は「理由は聞いていません。事実だけを聞いています」「あなたが〇〇さんを殴ったのは事実ですね？」「それは理由があれば許される行為ですか？」と、その行為そのものが許されないことに気づかせなければいけないと言われます。「子どものしたことだから……」「加害者にも理由があるから」と言い出すと、混乱が生じます。

小栗先生は、法務技官として少年鑑別所で少年たちと向き合ってこられた方ですから、大人が対応を誤ってしまうと善悪の区別がつかない人間になってしまうことを、身をもって知っておられるのでしょう。暴力やいじめに関して保護者も祖父母も学校もきちんとした対応が必要ですね。

小栗先生の著作の一部をご紹介し、少し私見も入れて書き進めてきましたが、私たちは、子どもたちに対して不用意に言葉を使っているのではないかと常々考えています。話しても分からない相手に対して、私たちは、どのようなことばを投げかけ対話につないでいけば良いのでしょうか。小栗先生は会話ではなく「対話」の重要性を説かれていますが、支援、指導というからには、やはり対話のテクニックが必要なのだと思います。「魔法のことば」で子どもたちを支え、大人同士も分かり合えるといいですね。

お知らせ

5/2 ピアサポート「ひまわりの会」（ソフトピアセンター）

5/8 センター親の会（今回は ソフトピアセンター10F）

5/27 不登校・ひきこもり家族会（ソフトピアセンター）